

# 瞳に映るもの

## 奪われた日常

これが現実なのか。いや、夢であつてくれ——。

目の前の悲惨な光景を目の当たりにし、何度も自分に問いかけました。

活気のある商店街、車が行き交う整備された道路、色とりどりのきれいな花が咲いていた公園、家族と泳ぎに行った海水浴場、フォークリフトが所狭しと走る漁港、整然と並ぶ家々。生まれたときからあつた日常の景色は、あの日、いとも簡単に奪われてしまいました。

いたるところに散らばつていくのがれき、アスファルトがめくれ上がり通れない道路、破壊されて鉄の塊となつた車、二階部分や基礎しか残らない建物。どの被災した地区へ行っても、そんな光景ばかりが広がっていました。

みんなの瞳は、暗く、呆然として、悲しみに満ちていました。「悔しい」。「津波が憎い」。

そのストレートな気持ちを聞いたとき、わたしは返す言葉が見つからず、ただうなづく事しかできませんでした。

あれから半年が過ぎようとして

ています。特集号の編集作業で、当時の写真を見るたびに「変わらない」と思っていた景色はもう戻らない」という思いが頭に浮かび、手が止まつてしまいました。早かつたのか、長かつたのかさえ分からず、気付いたら半年が経つていたように感じます。特集号を作つていいのだろうか。震災を思い出させる光景を載せていいのだろうか、と、ずっと悩んでいました。

## 復興へ向かう姿

東日本大震災発生からちょうど5カ月にあたる8月11日、山田漁港で花火大会が開催されました。

花火の打ち上げを待つ人でにぎわう会場の一角で全国から寄せられた色とりどりの風鈴が風に揺られて、涼しげな音色を響かせていました。風鈴につるさせてなびく短冊には「一緒にがんばろう」、「復興」といった、山田を応援する温かく、力強い言葉が書かれていました。

一つ一つの風鈴を見上げる子供。わたしは思わず、シャッターを切りました。その瞳は、あの日の悲しみに満ちたものではなかつたからです。

全国から差し伸べられた支援の手を握り、わたしたちは再び立ち上がりました。

被災した店舗を修理したり、新しくプレハブを建てたりして営業を再開した店。浜の活気を取り戻すため、準備に追われる漁師、みんな少しずつ歩み始め、元気を取り戻りつつあります。

取材をしていると、今の皆さんの復興へ歩みだしている明るく、輝いている姿がレンズ越しに映り、写真を撮っているわたしも笑顔になります。

復興は始まったばかりです。町の未来を思い、歩みを進める人たちの瞳は、これから進むべき道、その先にある山田の姿をしつかり見据えています。

山田は何度も津波などの大災害を乗り越えてきました。今回の大災害も、町民が力を合わせればきつと乗り越えられるはず

です。全町民一丸となり、以前のよう

な明るく、元気のある山田町にしていきましょう。  
【写真提供】橋浦恒一さん／佐々木一彦さん／澁谷力さん／家の光協会／陸上自衛隊／航空自衛隊／大雪りばあねつと／秋田県北市

〈特集終わり〉

